

物流「加速化」 × TSMCインパクト

2023.11.27

下

陸送倉庫拠点化へ投資続々

け、出荷調整の場所として活用する考え。久保社長は「もともと半導体関連工場への装置納品を主眼に置いていたが(TSMC進出による企業集積で)状況が変わった。隣地での増設を視野に入れつつ、八代港にも注目している」。

「これから新規事業として国際物流の国内部分、つまり生産拠点から輸出拠点への輸送を狙っていく」。台湾積体回路製造(TSMC)の菊陽町進出の商機を逃すまいと、運送業のヒサノ(熊本市)の久保誠社長は戦略を描く。「ウエハーではなく半導体製造装置の輸送こそ、うちの強みを生かせる」

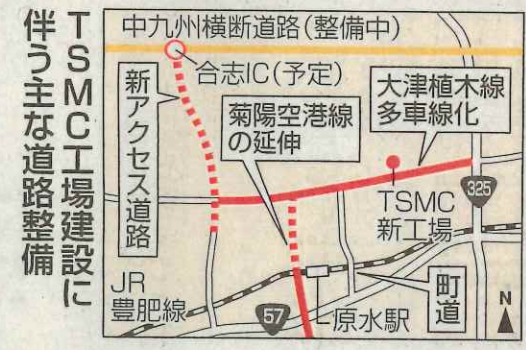
ヒサノは現在、TSMCの新工場向けに海外から届く装置の搬入や設置、組み立てに携わる。昨年6月、約10億円を投じて福岡県古賀市に精密機器に特化した営業倉庫を構えた。大型装置の重さにも対応するため、床には鉄板を敷き詰めている。倉庫は今後、博多港や門司港からの輸出の中間施設と位置付

TSMCの進出後、半導体関連のサプライチェーン(供給網)を担う企業の動きが活発化した。サトウロジック(大津町)は用地を新規購入し、定温倉庫の新増設に着手。半導体製造装置を組み立てる企業の委託を受け、来年9月の操業開始を計画している。装置を運搬する特殊車両も5台から15台に増やす。投資額は計31億円。土地が以前の倍ほどに値上がりし、取得費用もかさんだが「TSMC進出が追い風になっているのは間違いない」と、佐藤栄磨社長は事業拡大の背景を語る。

一方、県外大手も物流需要に熱い視線を注ぐ。総合物流のNRS(東京)は今夏、大津町に化学品などを扱う拠点を新設。外国貨物を置くことができる約



写真左はヒサノが福岡県古賀市に持つ営業倉庫。大型の半導体製造装置の重さにも対応している。同右は半導体製造装置などの輸送が可能なヒサノの専用車両(同社提供)



「半導体関連の輸送が増え、八代港や熊本空港などを利用する海運・空輸は今後、拡大する」と同社担当者。「博多港や門司港も考えられるが、陸送の距離などを考えると、地元施設の価値は大きい」とみる。

「一連の機能強化を進めることで「熊本の空港と港湾が南九州のハブ(拠点)になり得る」との見方もある中、郵船ロジステイクス熊本営業所の矢多正人社長は強調する。「農水産物も含めて、県内の生産品は県内の空港や港湾から出すのが理想的なはずだ」

(立石真一)

6千平方メートルの「保税蔵置場」を整備した。半導体製造に使う高圧ガスや薬液を台湾や韓国、中国から輸入し、空容器を輸出することなどを想定。既に営業を始めており、3〜5年後のフル稼働を見据えて1万平方メートル程度までの拡張も視野に入れる。

国際物流を手がける郵船ロジステイクス(東京)は本年度から、熊本営業所の体制を強化した。アジア各地域から入ってくる新工場向けの各種装置の輸送で、発送場所から到着までの流れを取り仕切る。現状では博多港や福岡県の空港経由が中心だといひ、将来的に新工場などからの輸出品の輸送を見据える同社は「熊本の空港や港湾の物流インフラは、まだ整備途上にある」とみる。